民謡を唄い踊れる喜び

民謡みすじ会

趣味とサークル

民謡みすじ会（浜野弘会長）は、敦賀を中心に民謡を楽しんでいる人たちの集まりです。「みすじ」とは三味線の糸の数3本から来ているとのこと。昭和59年に設立されました。

会員の皆さんは、唄（民謡）と地方（じかた）（演奏）、そして踊り（民舞）の三つの部門を学んでいます。

練習日については、「唄が松原公民館で第2・第4木曜の夜。若狭町から指導者（千田先生）を招いています。踊りは西公民館で毎週水曜夜の定例練習日のほか、月2回石川県から指導者（民舞北川会・北川和先生）が教えに来てくれています」とのこと。また、「地方は第2・第4土曜の夜、西公民館で。三味線、笛、平太鼓、締め太鼓に鼓弓（こきゅう）などを練習。坂井市から指導者（加納先生）を招いています」とのことです。

現在の会員は15人。1人で唄・地方・踊りの全てに挑戦する人もいれば、一つの芸に専念する人もいます。

みすじ会は、男性の踊り手が多いそうです。以前、踊りの部門で民謡の地方大会に優勝し全国大会に出たことがありますが、そのときは男性が6人いて迫力が受けたそうです。今後は女性をもっと増やしたいとのこと。

会員は30歳代から70、80歳代。働いている人や退職した人などさまざまです。やや年配の人が目立ちますが、「今は世の中、退職の時期が遅くなっていることもあって、趣味の会に入るのも遅くなっているのかもしれませんね」と話しています。

持ち唄は50曲ほど。全国各地の民謡に取り組んでいますが、やはり北陸の歌が多く、福井では「越前馬子唄」や「越前舟漕ぎ唄」、三方の「梅運び唄」などを。富山の唄も多く、五箇山の「こきりこ節」や「麦屋節」「越中おわら節」などを手掛け、特に哀調を帯びた「越中おわら節」は、敦賀まつりで、ここ10年ほど毎年披露しています。

敦賀まつりで「越中おわら節」を披露

練習の成果は敦賀まつりのほか、民謡の大会や市の文化祭で発表しています。福祉施設や老人会などの集まりにも呼ばれて出演しています。観客の反応は頑張りのもと。「少しでも拍手をいただくと、のっていけます」「舞台に出て人に見てもらうと緊張する。これが一番の上達法ですね」と話しています。

西公民館の踊りの練習にお邪魔しました。皆さん白足袋姿。曲に合わせて、しなやかに身をこなし、踊る楽しさが伝わってきます。

民謡の面白さについて聞いてみました。

「それはストレス解消でしょう」

「歌詞にひかれます。意味が分かってくると興味が増しますね」

「古来の民謡を歌い踊ることが私にもできるという喜び。慰問などにいけば喜んでいただけるし…」

「旅した土地の民謡が少しでもできると、地元の人達との雰囲気が和みますよ」

連絡先＝中嶋さん（電090－2121－1420）

■尊良親王ゆかりの碑

像と碑（ぞうといしぶみ）

敦賀市・金崎宮本殿の真裏の高台に、建武中興で名高い後醍醐天皇の皇子・尊良（たかなが）親王の名を刻む石碑が立っています。

親王は南北朝時代、金ヶ崎での足利勢との戦いで悲運な最期を遂げた皇子です。

江戸末期の安政年間、この付近から経塚が見つかり、石室から経筒、円鏡などが出てきました。このことから尊良親王の墓所と解され明治9年、この石碑が建てられたようです。しかし、京都に親王の墓所とされる所があることなどから、現在は親王自刃の地として大切に保存されています。

金崎宮は明治23年、親王を祭神に造られましたが、その後火災に遭い、明治39年に移転、再建されました。石碑は旧本殿の跡地に立ち、笏谷（しゃくだに）石で円筒形をしています。表面には「尊良親王御陵墓見込地」、裏面に「明治九年十月」の文字が刻まれています。

石碑周辺は敦賀みなとライオンズクラブによって整備され、月見御殿へ行く道の途中から登ることができます。